近畿大学
課題番号：SR11

平成22年度 学内研究助成金 研究報告書

研究種目	☐奨励研究助成金	☐研究成果刊行助成金
	☐21世紀研究開発奨励金 （共同研究助成金）	☐21世紀教育開発奨励金 （教育推進研究助成金）
研究課題名	インターネット・サーバを利用したラルフ・エリスン文学の新資料並びに新局面研究	
研究者所属・氏名	研究代表者：文芸学部文学科　教授　　辻　和彦 共同研究者：	

1．研究目的･内容

ラルフ・エリスン文学及びその批評史を総括するため、エリスンの第一次資料やその周辺に関わる歴史資料、文化資料を集める。アメリカのみならず日本における研究論文などを可能な限り蒐集し、それらの体系的位置付けを試みる。また小型サーバ・コンピュータを用い、情報の発信・受信をよりスピーディに行うことも併せて行う。

2．研究経過及び成果

本研究では、その研究過程を三段階に分けて計画し、以下のように実施してきた。

（第一段階）

ラルフ・エリスン研究の批評史を総括するため、エリスンの第一次資料やその周辺に関わる歴史資料、文化資料を集め、アメリカのみならず日本における研究論文などを可能な限り蒐集し、それらの体系的位置付けを試みるのが、第一段階である。これは体系的なエリスン研究がまだまだ少ないこともあり、順調に進んだ。運良くアメリカでの草稿出版も滞りなく進み、早期に出版物を入手して、他研究者に先駆けて研究を進めることができた。また情報発信手段としてサーバ・コンピュータを立ち上げるのもこの段階で重要なことであったが、十分なセキュリティ確保とハード、ソフト面の動作状況を確認しつつ、本格運営に移行する準備も進めることができた。

（第二段階）

サーバ上のアーカイブの作成にとりかかるのが第二段階である。そのために、一次資料の読解、エリスン文学批評史など周辺知識の吸収に努め、それらを適切にマッピングする作業に入り、これも概ね順調に進んだ。また音楽家志望であったエリスンの関心の方向性を考慮し、Blues や Jazz などの同時代音楽の関連書などを入手するなど、彼の「音楽環境」を徹底分析できる体制を構築することも予定の一部に組み込んであったが、これは国内で行うには限界があり、一定の制約を乗り越えるまでには至らなかった。いずれアメリカにて資料収集旅行を行う必要がある。またこのような国外における資料収集のみならず、国内での資料閲覧のために、モバイル機器にて、自らのサーバに簡易にアクセスし、データの閲覧、出し入れを行える環境を整えることも予定としてあったが、これも無事達成することができた。ただ一方で一年間という短い期間と、28万円という交付額からでは、できることにも限りがあり、どうしても情報の受信、送信のどちらも手動に頼りがちな「アナログ」的段階を完全に脱していないことは認めざるをえない。

（第三段階）

第三段階としては、それまで発表した口頭発表や論文などを編纂し始め、最終的な集大成への準備作業を行い、また資料収集において、作成するアーカイブのために、視覚的資料などを数多く集め、デジタル化して取り込むという作業を重視することを挙げた。現地での情報収集中も、研究室にあるサーバは稼動中であるはずなので、現地からインターネットを利用して、そのままサーバにデジタル化した資料を送ることができる。これは旅行中のモバイル機器の破損、故障などによって、貴重なデータが失われることが決して少なくはない事実を考慮すると、より安全であり、またそのまま、あるいは、すぐさまサイトで公開できるわけであるから、より情報伝達方法としてスピーディであることは間違いない。この段階では、研究計画の後半に入ったということもあり、情報の入手よりも、蓄積した情報を発信する方に次第に重心が傾いていくはずである。以上のような研究の「最終段階」としての第三段階にはまだ足を踏み込んだばかりであり、具体的に実現化していないが、あと数年かけてかたちにしていきたいと考えている。

（成果）

本研究計画の成果の一部は、来年度刊行される文芸学部紀要『文学・芸術・文化』に発表する予定である。その中では、エリスンが何故かつてアフリカ系アメリカ人文学の旗手としてもてはやされたか、何故現顧みられることが少なくなったのか、また生前中は長編『見えない人間』一作しか発表しなかったエリスンの死後発表長編作品がアメリカ文学史の中においてどのような位置を占められるべきものなのかが論じられることになる。さらにいずれ上述したのとは別の機会に、伝統的文学批評とテキスト・マイニングなどの「デジタル・スタディ」の融合の可能性についても、論考を示すことができればと考えている。

3．本研究と関連した今後の研究計画

本研究計画と関連する研究計画は二つある。一つ目は20世紀アフリカ系アメリカ人文学と音楽の関係性を調査し、論じることを目的とするものであり、大きな主題ゆえにそれなりの時間が必要となる。二つ目は文学における「デジタル・スタディ」の可能性を追求するものであり、単なる「検索」や単純な「アーカイヴ」以上のものに、どのようなデジタル的手法を用いれば近づけるのかという問題を解くものである。これは文学研究というフィールドへの研究手法の追求という側面が強いが、接し方に変えれば、あるいはそれ自体が巨大なフィールドともなりうる。いずれにしても、今回のチャレンジが、この手強い両者の主題への追求へと突き進む原動力になればと考えている。

4．成果の発表等

発　表　機　関　名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日(予定を含む)